

2017年5月14日(日)

説教:「バプテスマの恵み」

聖書:ローマの信徒への手紙6:1~14

ヨハネ福音書3章にニコデモの話がある。ニコデモは、ファリサイ派に属しユダヤの議員であった。律法を熟知し、自負もあった。その彼が、「ある夜」イエスのもとを訪ねた。するとイエスは問う。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と。ニコデモは、「年をとった者が、どうして生まれることができますよう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか」と答える。そもそもニコデモは、何を尋ねにイエスのもとに来たのか？ 多分、律法を熟知し歩んでいても満たされていないものがあつたのであろう。隠れるように「夜」イエスを訪ねている。ニコデモの「もう一度母親の胎内に入って…」という返答には、自分がこれまで努力し、自分を小さくし、謙虚に律法に生きてきた…。しかし、これ以上、小さくなることはもう出来ないという意味がある。あくまでも自分自身がいつまでも生き続け、中心にいるという意味がある。でもイエスの言われる「新たに生まれなければ」という問いは、自分自身がキリストと共に死に、キリストと共に生きるということである。

自分の努力で、「新たに生まれなければ」ならないということではなく、キリストに身を委ね、キリストが十字架に死に、復活に生きたように、キリストと共に死に、キリストと共に生きるということ。そのことは、私たちに与えられた「バプテスマの恵み」に見ることができるのである。

今朝のロマ書は、私たちに与えられたバプテスマは、キリストを信じ、キリストに身を委ね、キリストが十字架に死に復活に生きたように、私たちがバプテスマを受けることにおいて与えられた「バプテスマの恵み」ということである。

そして、「バプテスマの恵み」とは、「罪は、もはや、あなたがたを支配することはない」ということにある。ここで言う「罪」とは、ギリシア語の「ハマルティア」である。それも単数。ただ一つの罪ということ。「ハマルティア」の罪とは「的外れ」、「神を知らない」という罪。私たちがバプテスマの恵みに与かるとは、「神を知らない」という罪の中に居ることはなく、常に神の下、恵みの下にいるということ。

「従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあつてはなりません。また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい」(12, 13 節)。

「バプテスマの恵み」を改めて、問い直して行きたい。是非、「バプテスマの恵み」を受けて頂きたい。(神谷)